

CONTENTS

巻頭言 「学士課程教育機構への期待」	学長 馬場 善久……1
[GCP] GCPの取り組み……2	
[WLC] WLCの取り組み……3-4	
[SPACe] 2020年度秋学期についてのご報告……5-7	
[CETL] CETLの取り組み……8	
新任教職員紹介……8	

創 価 大 学 学 士 課 程 教 育 機 構 ニ ュ ー ス レ タ ー

学士課程教育機構への期待



学長 馬場 善久

本学の学士課程教育機構（以下、機構と記す）は、創立50周年を目指した「創価大学グランドデザイン」の教育分野での事業を推進することを目的に2010年4月に誕生した。それまでの共通科目運営センター、WLCとCETLを統合し、本学の学士課程の教育の質保証を各学部と連携して担う全学的組織として企図された¹⁾。2020年度は「創価大学グランドデザイン」の最終年度にあたり、教育分野で掲げた25項目で達成度100%が24項目、90%が1項目という結果となった。過去10年間あまり、機構がグランドデザイン目標への大きな推進力となったことに感謝を申し上げたい。歴代の機構長、機構の活動を支えて頂いた本学教職員ならびに学外の協力者の全ての方々に御礼を申し上げたい。また、2020年度は新型コロナウイルス感染症のために急遽対面授業からオンライン授業への切り替えを余儀なくされた。CETLを中心にして機構の皆さんの協力のお陰で教育の継続が可能となったことに重ねて御礼を申し上げたい。

2021年4月に創価大学は創立50周年を迎え、新たな10年間の中長期計画「Soka University Grand Design 2021-2030」を掲げて新たなスタートを切った。この計画のテーマは「価値創造を実践する『世界市民』の育成」で、変化の激しい社会においても活躍できる人材の輩出を目指している。機構はこの中長期計画の達成に引き続き大きな役割を果たすことが期待される。

過去10年間を振り返ると、3ポリシーの改定や学習成果の可視化の取り組みについて機構は本学を先導してきた。2011年度では早くも共通科目で「共通科目ラーニング・アウトカムズ（LOs）アセスメント」のパイロットプログラムとしての授業報告書を開始した。また、「大学教育再生加速プログラム（AP）事業」の採択後はCETLを中心に各学部と協力して、学習成果の可視化の取り組みを推進してくれた。今後も、機構には、これまでの取り組みを基盤にして本学における教育の内部質保証実質化を推進することが望まれる。

本年度には2018年度生から適用されてきた教育課程が4年目を迎え、この教育課程のプログラムレビューの準備を今後本格化する必要がある。機構は2018年度

と2019年度に「アセスメントポリシーに基づいた学習成果の測定と可視化」を推進してきた。昨年までの数年間にわたってモニタリングしてきたデータ等をもとに、2018年カリキュラムのレビューを実施して機構の教育の質改善に取り組むこととなる。

その際に、次のような観点を踏まえてレビューを実施することが必要であろう。1点目は、大学全体の「創造的世界市民」に関する4つの資質、機構の8つのLOsと各授業科目の該当するLOsの到達度という3層構造からのプログラムレビューを実施することで次の改善のサイクルへ橋渡しをするということである。2点目は「学生のための大学」を標榜する創価大学としては、学習者本位の観点からレビューを実施するということである。機構のLOsがどの程度学生によって認知されているのか。学期ごとに学生たちは自分の学習に関して振り返りを行って、次の学期の学習目標を定めているのか。学生に振り返りのための情報をわかりやすく提供できているか。理想的には一人ひとりの学生の各LOsの達成度を測定し、機構のプログラムレビューをすることでプログラム全体の達成状況を明らかにすることが望まれる。3点目は、IRを有効に活用することでレビュー作業を効率的に実施できる体制である。この点については、昨年の感染症対策で各種サービスのオンライン化が大幅に進展し、そして、本年度より学事課にIRを推進する部署（仮称「大学評価・IR室」）が設置される。機構とこの大学評価・IR室が協力することで、作業の効率化を図りたい。

結びに、一人ひとりの学生が今後本学の10年間の人材養成目標である「価値創造を実践する『世界市民』」として成長できるように、機構が各学部と協力して各種プログラムの推進をされることを強く期待したい。

参考文献

- 山本英夫（2010） 発刊に寄せて 学士課程教育機構研究史誌 第1号、5-6。
 寺西宏友（2010） 創価大学教育改善サイクルの方向性—学士課程教育機構の課題と使命 学士課程教育機構研究史誌 第1号、15-23。

1) 機構の設立の経緯ならびにその目的については以下を参照のこと。山本（2010）、寺西（2010）。

GCPディレクター 佐々木 諭

第8回GCP修了式を開催

第8回グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）の修了式が、3月17日（水）に開催され、6期生1名、7期生18名、8期生12名の計31名にGCP修了書が授与されました。今年度修了したGCP生は、国内外の大学院進学、国際的な日系・外資企業への就職、防衛省職員採用試験の合格など、目覚ましい進路結果を勝ち取りました。

修了生を代表して東京大学公共政策大学院に進学する布川裕一さん（GCP8期生・経済学部卒業）とアマゾン・ジャパンに採用された川上智美さん（GCP7期生・経済学部卒業）が代表挨拶を行いました。

布川さんは、創立者が創価大学生に送られた「労苦と使命の中のみ、人生の価値（たから）は生まれる」を胸に、家庭が経済的に困難な時期も、先輩や教職員の支え、必死に学ぶ同期の姿に触発され、挑戦を続けられました。米国マサチューセッツ州立大学ボストン校に留学し、経済学の専門科目の学びに取り組むとともに、貧困家庭をサポートするボランティア活動にも従事しました。このことを機に、生活に苦しむ人々が安心して暮らしていける社会制度の構築を目指し、公共政策大学院の進学を決意されました。「これからも創大で学んだ『労苦』を恐れず『使命』に燃え全力で挑戦する姿勢を貫き、お世話になった方々に恩返しできるよう努力し続けてまいります」と語りました。

川上さんは、米国デラウェア大学の交換留学、国際ユースフォーラム、ハーバード大学アジア国際プロジェクトへの参加など学外の活動に積極的に挑戦するとともに、万葉国際寮寮長を

務められ、後輩学生のサポートにも尽力してきました。入学当初は英語の成績が思うように伸びないなどの壁にぶつかることもありましたが、挑戦し続け、企業の採用試験では、「GCPで培った英語力や課題解決力を活かした海外経験など、創価の哲学である『人のため、社会のために』と自分から行動を起こしていく姿勢」が高く評価され、希望する進路の採用を勝ち取りました。

田代理事長、馬場学長をはじめ教職員らに祝福され、GCPを修了した31名は、それぞれの新しい場所で世界市民への挑戦を続けられることを期待しています。

第11回GCP総会をオンラインで開催

第11回GCP総会が、1月9日（土）にオンラインで開催され、GCP生や卒業生ら約140名が参加しました。GCP総会はこれまで、創価大学で年に2回開催してきましたが、昨年は新型コロナウイルスの影響で開催することができず、1月にオンラインでの開催となりました。総会には日本各地のみならず、中国、シンガポール、米国からも卒業生が参加しました。

総会では、在學生を代表し、松浦果歩さん（GCP11期生・法学部）が、GCPの友人たちと励ましあいながら積極的に語学、専門科目の勉強に挑戦し、成長した姿を報告しました。また、嶺岡秀美さん（GCP7期生・経営学部）は、米国メアリー・ポールドウィン大学への留学から帰国した後の就職活動において、採用で結果が出ない中でも、あきらめずに奮闘を続ける中で、希望通りの就職を勝ち取られたことが報告されました。嶺岡さんは「この経験を通してどのような状況でも、常に成長し続ける価値創造の生き方の土台を築くことができました」と語りました。

その後、GCP 1期生の菅原将さん（工学部卒業）から、GCPで培った精神性と英語力で、ジョーンズ・ホプキンス大学大学院で博士課程の研究に励み、免疫学の博士号を取得し、現在はハーバード大学医学部附属の研究施設において博士研究員として新型コロナウイルス関連の研究に尽力している様子が報告されました。

最後に馬場学長は、「地道な努力を重ねて、いかなる環境にあってもそこに意味を見出し、自分自身を強め、他者の幸福へ貢献しゆく、価値を創造する世界市民の役割を、GCP生に先導していただきたい」と、GCP生への期待を語り、励ましの言葉を送りました。



代表授与
GCP修了式代表挨拶（布川裕一さん）



全体写真
GCP修了式に参加した修了生



オンラインGCP総会

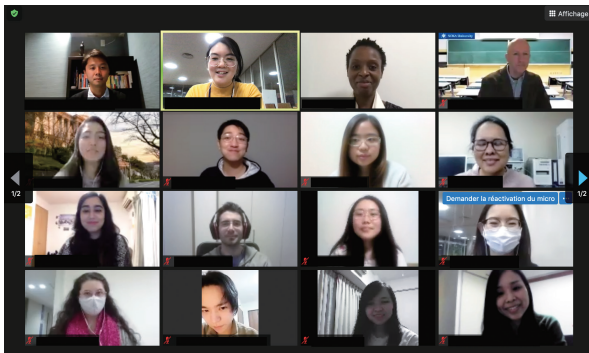
第17回グローバル・レクチャー・シリーズ

11月27日Zoomを利用し第17回グローバル・レクチャー・シリーズが開催された。特定非営利活動法人（NGO）ワールド・ビジョン・ジャパン（WVJ）アフリカ地域担当課マネージャーの望月亮一郎氏が「世界の貧困と農業：ルワンダのケーススタディー」と題し英語で講演した。

開発の観点から貧困の概要を説明した後、望月氏は自身がルワンダで取り組んだ具体的なプロジェクトを紹介した。現地の農業従事者の生活向上を目的としたこのプロジェクトにおいて、WVJは大手企業と提携し、高値で生産物の取引を可能とする整合的な市場を提供した。

講演中、セルフ・アクセス・センター（SAC）のスタッフがZoomのブレイクアウトセッション機能を利用し、学生の講演内容の理解確認や、質問を考える際のサポートを行なった。アンケート結果によると、2名の参加者が「こういった小単位のブレイクアウトセッションがあって良かった」と述べていた。SACスタッフは「学生は初め話すのを躊躇していたが、徐々に慣れディスカッションに貢献してくれた」と学生の変化を指摘した。コリン・ランドルWLC副センター長は、「学生は単に講演に参加しているという受け身の姿勢ではなく、意義のある質問をしながら参加していた」と称賛した。

約40名の学生・教員が参加したが、講演後のアンケートには参加者から今回の講演について「よく準備され、構成されていた」や「参加者全員がテーマを身近に感じられるよう工夫されていた」等の意見が寄せられた。学生による講演の理解、参加型への転換という目標が次第に感得される機会となった。



CEFR導入プロジェクト中間報告

2018年に開設20周年を迎えたワールド・ランゲージ・センター（WLC）は、今後のさらなる発展を目指し、ヒューマンスティックアプローチとヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: CEFR）を軸にした共通科目英語科目のカリキュラム改編を進めている。本稿では、WLC副センター長ランドル准教授を筆頭に、その他4名の講師が進めているCEFR導入プロジェクトの中間報告と今後の展望を紹介する。

ヨーロッパで開発されたCEFRは、教育機関が定めた力

リキュラムに沿って進めるトップダウン型の言語教育から脱却し、学習者を自律した一人のエージェントとして捉える意識変革を根底に置く。自律した学習者の育成のために、CEFRはCAN-DOステイトメントを使用する。このCAN-DOステイトメントは学習者の言語発達をA1・A2（基礎段階の言語使用者）、B1・B2（自立した言語使用者）、C1・C2（熟達した言語使用者）に分け、課題と目標設定を明確にする。加えて、学習者が陥りがちな「成績評価のための学習」ではなく、学習の進捗度を測るために評価を使用する、いわゆる「学習中心評価」の認識を浸透させる。また、CEFRを導入することにより、プログラム運営において、特定の目的意識をもって言語を学ぶ活動志向アプローチの推進、より柔軟で長期的な教育内容、方法の改善と教育課程編成を可能にする。

現在進めている新カリキュラムの準備の一環として、学習者のニーズを把握するためアンケート調査を行った。この調査には、4学部（法、文、教育、看護）に所属する一年生、321名が参加した。今回の調査でさまざまな発見があったが、特に目を引いたのは、現行のカリキュラムと、学生のニーズとのギャップが明確になったことだ。アンケートでは、およそ8割の参加者が「日常で使用する英語」を一年生の共通科目英語科目で学びたいと答えた。その一方で、現行の学術英語の習得を中心に構成されたシラバスで、英語力の向上を実感している声も多かった。こうした結果から、新カリキュラムの編成では学習者のニーズを考慮しつつ、WLCが培ってきた英語教育の経験をうまく還元することが必要となる。加えて、CEFRを英語スキルの発達の土台とする一方、本学が標榜する人間教育にも通じるヒューマンスティックアプローチを通して学生の豊かな情緒育成も図っていく予定だ。

これらの要素をシラバスレベルで実践すると、初級レベルでは、実際の生活で使うことができる英語スキルや自己表現の方法を、スキットや文学・芸術作品についての対話を通して学ぶ。また、中級以上では学術英語をProject-Based Learning（問題解決型学習・課題解決型学習）を中心にCEFRに準拠したシラバスを構築していくことが考えられる。

今後のプロジェクトの展望には以下が挙げられる。新シラバスの本格的導入に向け、CEFRを使用する目的や意義を、まずWLC所属教員により深く理解してもらう必要がある。具体的には、2021年5月にCEFRに準拠したシラバス改訂のためのワークショップを開催し、教員主体でボトムアップ型のシラバスを編成していく。同時進行で、CAN-DOステイトメントを盛り込んだニーズ調査の実施、学生が自身の言語発達を把握するためのeポートフォリオ作成、教科書選定、そしてセルフアクセスセンターとの連携も行う。中でもeポートフォリオは、学生が大学を卒業した後も、授業で作成したエッセイやプレゼンテーションの動画データにアクセスし生涯に渡り語学学習を継続できる体制を整える予定だ。

創立50周年を迎えた本学で、このような形で大学建設に携われることは大きな喜びである。今後も、創立の精神と、創価大学教員としての誇りを心に秘めプロジェクトを進めていきたい。

プロフェッショナル・ディベロップメント (PD)

ワールドランゲージセンター (WLC) では、2020年度秋学期、Zoomを利用したPDを3回実施した。2020年度春学期PDではテクノロジーを利用した授業実践に焦点が当てられたが、秋学期に行われたプレゼンテーションではロールプレイを使った活動、語彙学習、言語学習者としてのアイデンティティの保持といった題材が扱われた。これらの内容はどれもオンライン授業に組み込むことが可能なものであった。

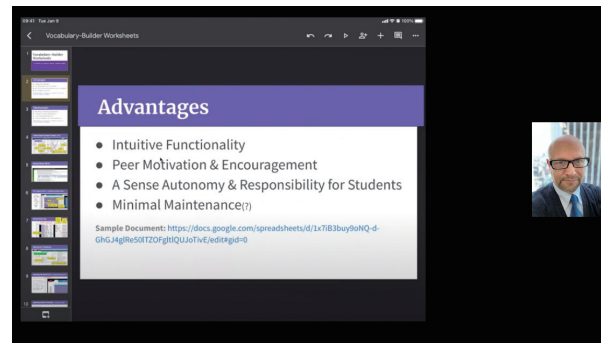
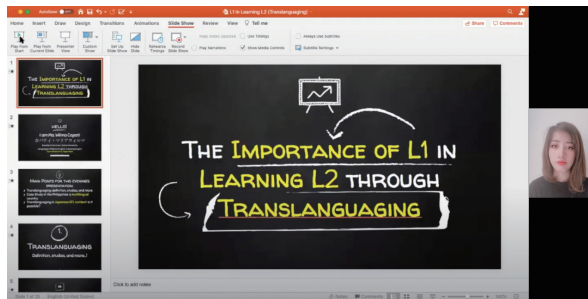
10月21日に行われた第一回目のPDでは、チャンダール・ラトル助教がタスクに基づく言語指導法 (TBLT) に関する説明を行い、言語クラスで用いるロールプレイやプロセスドラマ等の指導法について報告した。ワークショップの初めには、ドラマに関する活動を行うためにラトル助教が独自に考案したTBLTフレームワークが紹介された。参加者はその後、オンライン授業で活用可能なテクニックを実際に体験した。それに加え、対面で行った方がより効果的である活動の紹介も行われた。

11月18日に開催された第二回目のPDでは、本学大学院の国際言語教育専攻英語教育専修 (TESOL) と連携し、講師としてクリスティン・クーム氏を招いた。講義の中でクーム氏は世界の多くの英語教員がアセスメント・リテラシーについてもっと理解を深めるべきであると論じた。この論点を明確にするために、講義の初めに本分野における英語教員のスキル向上を目的として使われている様々な国際

的イニシアチブの概要が述べられた。講義の後半では、言語教育に携わる教員のアセスメント・リテラシースキルの向上のため、利用可能なその他のイニシアチブについての説明も行われた。

最後に、11月18日に行われた第3回目のPDでは、ウィルマ・キャパティ助教とフィル・スティルウェル非常勤講師がそれぞれの研究テーマである「トランスランゲージング」と「オンライン語彙学習」について発表した。初めにウィルマ・キャパティ助教は、トランスランゲージングを通して第二言語学習における母語の重要性について述べた。また、フィリピンでの例をケーススタディーとして取り上げ、多言語教育の学習環境において、どのようにトランスランゲージングが行われているかについて論じた。さらに日本の高等教育機関における英語科目でも適用可能な様々なトランスランゲージングの方法が紹介され、学生のアイデンティティを保持することの重要性を強調した。

続くプレゼンテーションでは、フィル・スティルウェル非常勤講師が、学生が行っている語彙学習の進行状況を確認する方法について発表した。プレゼンテーションの冒頭で、独自に作成した語彙学習用のGoogleスプレッドシートが紹介された。このシートを活用することにより、オンライン上での学生同士のモチベーション向上をサポートし、学生は見直しが可能な語彙習得の記録表として利用できる。さらに、このシートが学生の学習に対する責任感を促すとした。いずれのPDもオンライン授業が継続される中、教員の士気を高め、必要なスキルを学ぶ格好の機会となった。



■WLC 教員の紹介 ポール・ホーネス准教授



米国出身のポール・ホーネス准教授は、カリフォルニア大学にて政治学学士号、修士号、テンプル大学にて教育学修士号、博士号を取得した。2017年創価大学に准教授として着任して以来、主に大学院国際言語教育専攻英語教育専修 (TESOL) で指導している。

研究領域は第二言語教育における評価、海外留学の効果、国際関係等である。創価大学における留学プログラム開発に積極的に携わっており、フィリピンのイースト大学で行われる海外短期研修の発展に貢献している。実際に

学生に同行しマニラへ出向き、学生の留学がより有意義な体験となるようプログラムの発展に努めた。模擬国連に関心のあるホーネス准教授は学生に日本英語模擬国連大会 (JEMUN) に参加するよう呼びかけている。

Horness准教授は現在、留学先で行う課題の困難度分析や国際問題に焦点を当てたボードゲームの使用をテーマに研究を進めている。今後創価大学での留学プログラムの種類をさらに増やすことにより、全学生が異文化に対する理解を深める機会を得て、世界の平和や繁栄を促進する力をつけて欲しいと考えている。



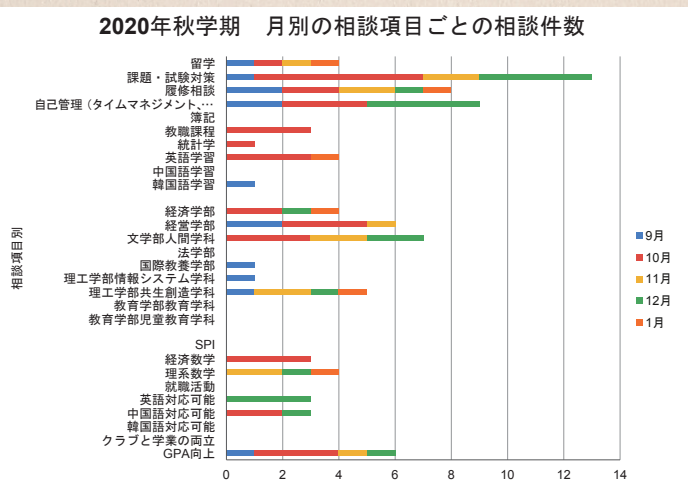
創価大学ラーニング・commons「SPACe」総合学習支援センター 2020年度秋学期についてのご報告

2020年度秋学期も新型コロナウイルス感染防止のため、春学期に引き続きオンラインサービスを行いました。ここでは、秋学期のSPACeの取り組みについてご報告します。

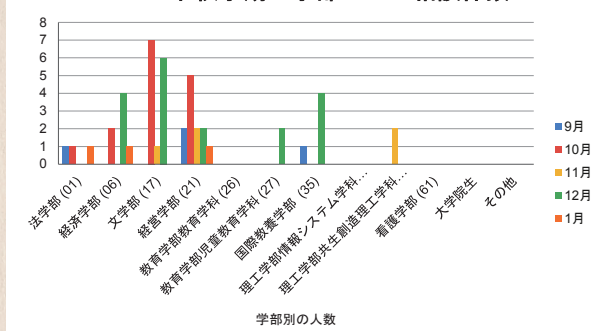
ヘルプデスク

2020年度秋学期のHelp Deskサービスは、春学期同様、オンラインで提供しました。主なサービスは、ピア・サポートと呼ばれる学習・自己管理相談と学習セミナーです。2020年度はオンラインでのサービス提供となりましたので、2019年度（対面でのサービス提供）と比較しながら報告いたします。

2020年秋学期 月別の相談項目ごとの相談件数



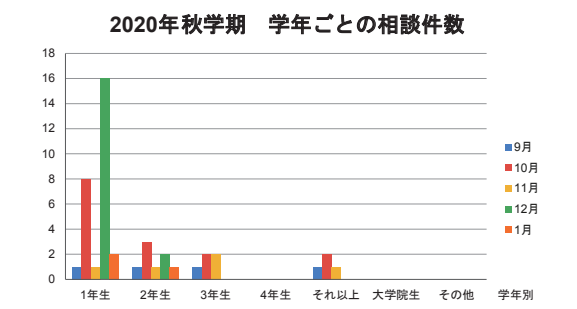
2020年秋学期 学部ごとの相談件数



秋学期の傾向は、中間・期末試験の時期である10月・12月に相談件数が多くありました。2019年秋学期と比較すると、課題・試験対策に関する相談が2倍に増えました。一方、学部別相談は2019年秋学期の方が2020年秋学期よりおよそ2倍の相談数がありました。オンラインという環境で、より個別授業に関する対策の相談が多かったのですが、横と縦の繋がりが難しかったのか、学部に関する相談は少ない結果となりました。

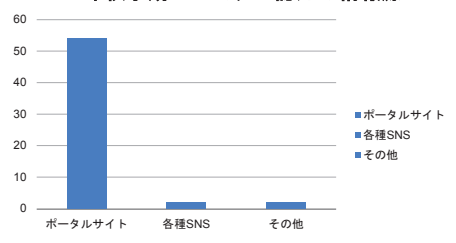
全体的には、オンラインでのサービスでは9月に利用する学生が大幅に減少しました。特に、2・3・4年生の利用者が減少しました。2年生以上は去年までの対面でのサービスに対する意識が高かったのかもしれない。

2020年秋学期 学年ごとの相談件数

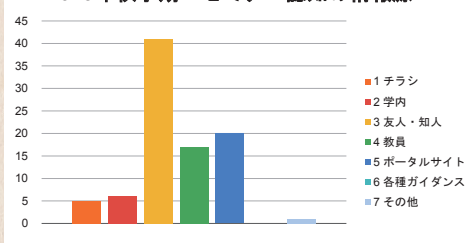


学年を見てみると、例年通り1年生の利用が多くみられました。1年生にHelp Deskサービスが利用されたことは大変嬉しいことです。しかし、対面でのサービスと比較すると、利用人数は少なかったと言えます。2019年度秋学期では、2年生の利用者は1年生の約25%であったのに対し、2020年では約57%の割合と増加していました。例年であれば、より多くの1年生がSPACeという場所を訪れることで、Help Deskに立ち寄り質問をすることができていました。オンラインという環境では「ちょっと立ち寄ってみる」ということが難しかったといえます。

2020年秋学期 セミナー認知の情報源

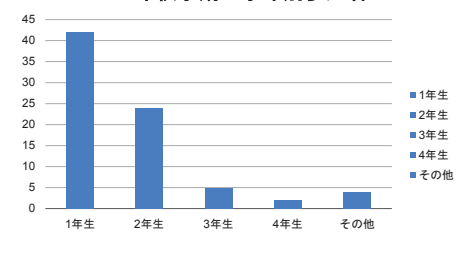


2019年秋学期 セミナー認知の情報源

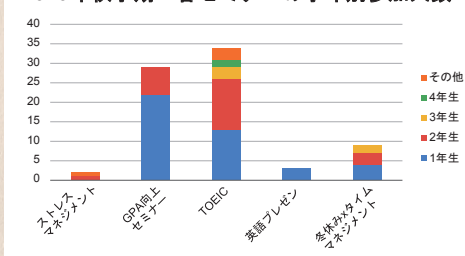


学習セミナー認知の情報源の数字を見ると、学生同士がつながることの難しさがわかります。これまでは友人や教員からの情報によって参加していた学生が多かったのですが、2020年秋学期では、セミナー別に見てもポータルサイトの情報で参加した人がほとんどでした。ポータルサイトから自ら情報を得るということは嬉しいことです。加えて、2021年度春学期は友人との繋がりも増えることを願っています。

2020年秋学期 学年別参加者



2020年秋学期 各セミナーの学年別参加人数



2020年秋学期のセミナー参加者をセミナーごとに見ると、TOEICのセミナーでは1、2年生以外の学年も参加しています。就活や留学のために参加しているのかもしれませんが、学年別に比較をすると、2019年度、2年生は1年生の約25%でしたが、2020年度では約57%の割合を占めました。1年生のセミナーへの参加度が低かったのかもしれませんが、セミナーは個別相談とことなり、他の学生とつながる機会にもなると思います。2021年度春学期では、ぜひ新2年生にもより多くのセミナーを利用してほしいと思います。

日本語ライティングセンター

日本語ライティングセンターでは、レポートチュータリング、レポート診断、学習セミナー、図書館連携イベントなどのサービスを提供しています。2020年度はフルオンラインでサービスを行いました。

レポートチュータリングでは、自律的な書き手を育成するために、Zoom上でのチューターとの対話を通して、レポートのプランニングからアウトライン、文章の生成、推敲といったライティングプロセスを支援しました。秋学期は延べ170人余りの学生が利用しました。レポート診断では学部と連携したカリキュラム連携型学習スキル訓練（ASTAC）の利用もあり、延べ150人余りの学生が利用しました（表1）。

■表1 2020年度秋学期利用者（人）

	9月	10月	11月	12月	1月	計
レポートチュータリング	2	24	46	74	25	171
レポート診断	1	15	67	31	37	151

また、学習セミナーとして、文献検索や文献管理ソフトRefWorksの活用法、レポート作成に必要な日本語表現や事実と意見を書き分ける方法など、ライティングプロセスを支援するセミナーを実施し、延べ160人余りが参加しました（表2）。

■表2 2020年度秋学期JWC学習セミナー

月	セミナー名	参加者(人)
9月	Wordの使い方 ※動画配信	—
10月	自分の見たものを他者に正確に伝える～事実と意見の書き分けを意識しよう～	33
	レポートお助け隊	15
11月	「伝えたいこと」を伝えるために～文章の掘り下げ方を考える4	11
	ワークショップ「他者に伝わる表現を意識する」	12
	文献探索セミナー「文献探索の森に分け入る」	27
12月	Refworksの講習会「これであなたも文献管理の達人！一使いこなそうRefworksー」	39
	レポートを書く際に必要な日本語表現	5
	レポートお助け隊	11
	レポートお助け隊	11
計		164

加えて、図書館と連携して8つのイベントを実施し、延べ290人余りが参加しました（表3）。

■表3 2020年度秋学期JWC図書館連携イベント

月	イベント名	参加者(人)
11月	特別文化講演「人間ゲーテを語る」を学ぶ	55
	ブックトークを楽しもう	32
	戸田大学・池田文庫・読書案内	28
12月	万葉集を散歩する	26
	朗読ワークショップ	19
	朗読実演と解説	35
1月	「鬼滅の刃」の魅力を探る	55
	「鬼滅の刃」ビブリオバトル	41
計		291

2020年度はコロナ禍でサービスを対面からオンラインに変更せざるを得ませんでした。オンラインでのサービスはチュータリングのキャンセル数が減少したり、イベントへの参加の利便性が高まったりと新たな可能性も見出すことができました。

調べごと相談

「SPACe調べごと相談」のコーナーでは、レポートや卒論の参考文献検索、データベースの利用方法、その他の調べごと等の相談に応じるレファレンスサービスを行っています。（週3日間／一日3時間在席）

2020年度は、大学の感染症対策に伴うオンライン授業に対応するため、4月（実質は5月）より、オンラインレファレンス（①オンラインWeb会議システムでの対応、及び②メールでの対応）を行いました。アクセスし易い「オンライン」という実施方法であったことやメールによる回答も追加したこと、又、授業サポートやオンラインセミナーを通して「学術文章作法」担当教員と連携したこともあり、対面ではなくても、昨年度（94件）と比較して年間としては同数程度（93件）の質問をいただき回答しました。（右表は秋学期のみの数値になります）

■ SPACe調べごと相談(レファレンス)利用者数/2020年度・秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期	%
学術文章作法	0	2	4	16	3	25	62%
演習（卒論）	3	5	3	0	0	11	28%
その他	0	1	2	0	1	4	10%
	3	8	9	16	4	40	

2020年度 FD・SDセミナー（学士課程教育機構主催）

■ 第1回FD・SDセミナー「オンライン授業における成績評価」

7月8日（水）、愛媛大学の仲道雅輝氏に講師をご担当いただき、オンライン会議システムZoomを用いて2020年度第1回FD・SDセミナーを開催いたしました。

オンライン授業の成績評価、そのポイント、オンライン授業の設計等についてご講演いただきました。現在のコロナ禍において、本学では春学期フルオンライン授業が実施されておりますが、「オンラインの有無に関わらず『学習目標』が最も重要であり、授業設計では、同期と非同期のメリットを最大に出来るよう工夫することが大切」との趣旨の話があり、参加者にと

って多くの気付きが得られたことが伺えました。

85名（教員81名、職員4名）の方に参加いただき、アンケートには、「オンライン授業における評価方法の多様さに改めて気づかされました」「オンライン授業のメリット・デメリットは、多くの教員間で共通の印象であり、課題も共有できていることを知り安心しました」「オンライン授業での課題も、よく考えると意外と従来型授業の場合と同じであることにあらためて気づいた」等の声が寄せられました。

■ 第2回FD・SDセミナー「オンライン授業の授業設計」

7月30日（木）、第1回に引き続き、愛媛大学の仲道雅輝氏に講師をご担当いただき、Zoomを用いて第2回FD・SDセミナーを開催いたしました。

オンライン授業の設計、授業設計のコツ、オンライン授業Q&A、愛媛大学での実践事例等についてご講演いただきました。

「工夫次第で、対面と同等もしくはそれ以上の効果を上げることは可能」「オンライン授業で反転授業も可能」「愛媛大学でもLMSを活用し、eラーニングを実践している」との趣旨の話があり、参加者にとって多くの有益な情報が得られたことが伺えました。

75名（教員75名）の方に参加いただき、アンケートには、「授業設計のコツを具体的に教えていただき、非常に参考になりました。」「試行錯誤のオンライン授業でしたが、改めて自分

の授業を振り返り確認する良い機会となった」「先生方とオンライン授業に役立つ情報交換ができて大変有益なセミナーでした」等の声が寄せられました。



■ 第3回FD・SDセミナー「Zoom授業をインタラクティブに楽しくする工夫」

12月23日（水）、本学教育学部の山内豊教授に講師をご担当いただき、Zoomを用いて第3回FD・SDセミナーを開催いたしました。

「コロナ禍のオンラインZoom授業の課題」、「ZoomによるAL型授業の流れ」、「電子ポートフォリオの活用」、「Zoomの使い方」等についてご講演いただきました。ZoomによるAL型授業における「協働」をサポートするツールとして、Googleアプリ（シート、ドキュメント、ドライブ等）及び本学ポータルを効果的に使用したグループワークの手法の説明や、Zoomを活用した模擬授業の様子の紹介等があり、参加者にとって多くの有益な情報が得られたことが伺えました。

134名（本学教職員）の方に参加いただき、アンケートには、「オンライン環境においても学生に細やかな配慮をされ、アクティブ・ラーニングを展開されている講師の取り組みに感銘を

受けました」「授業内での交流によって、オンライン授業の距離感を縮めていけるとのご指摘が大切であると思いました」「本日得た知見を実際の授業で活用できるように勉強して参りたいと思います」等の声が寄せられました。



第7回創価大学教育フォーラム（第18回FD・SDフォーラム）開催

2021年2月20日（土）Zoomウェビナーを用いて第7回創価大学教育フォーラム（第18回FD・SDフォーラム）を開催しました。学内外より大学関係者や高等学校教員、学生ら約200名の参加がありました。

フォーラムでは、本学の馬場学長の挨拶の後、文部科学省高等教育局専門教育課課長補佐の木谷慎一氏が「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）の認定制度について」と題して講演を行いました。



木谷氏

文科省が今後推進する認定制度について導入の検討がなされた社会背景、目的、認定制度への申請にあたっての注意事項やモデルカリキュラムなどの概要を述べられました。数理・データサイエンス・AI教育の重要性を指摘され、「2025年以降、初等中等教育段階で数理・データサイエンスなどの教育を受けた学生が大学に入学してくる時代になる。理系、文系の学部関係なく、利活用をどのように行うか。基礎教養として大学教職員にもそのリテラシーが要求されることになるのではないか。」と述べられました。

続いて、Zoom Video Communications Japan株式会社 セールスマネージャー 島方敏氏が「Zoomを使った効果的な遠隔教育ノウハウと海外での活用事例」と題して講演しました。海外大学でのZoomを活用したオンライン授業の事例や、教育をはじめとした様々な分野におけるオンライン化等の変化について言及され、「コロナ禍の劇的な変化によって起きた様々な分野のオンライン化で、そのメリット、

デメリットが見えてきた。Afterコロナに元に戻るものもあれば、むしろオンラインだからこそ出来ること、それを活かしてより良いサービスの向上が見込まれる分野などがあり適切に判断していくことが求められるのではないか。」と述べられました。

その後、「本学の取り組み紹介」と題して、ワールドランゲージセンター長 尾崎准教授より、創価大学の共通科目英語教育における適応型CBTの取り組み、法科大学院の嘉多山教授から、独自にシステムを構築したハイフレックス型授業取り組み、そして国際教養学部の吉江講師より、ウィキペディアを活用した歴史教育における教育実践の取り組みの紹介がありました。



島方氏

デメリットが見えてきた。Afterコロナに元に戻るものもあれば、むしろオンラインだからこそ出来ること、それを活かしてより良いサービスの向上が見込まれる分野などがあり適切に判断していくことが求められるのではないか。」と述べられました。



小松川氏

続いて、公立千歳科学技術大学 理工学部情報システム工学科教授、情報メディアセンター長 小松川浩氏が「個別最適化学習（アダプティブラーニング）の実現に向けて」と題して講演しました。公立千歳科学技術大学における教育実践について、参加者とともに実際のシステムを使用しながら概要を述べられ、「個別最適化されたオンライン授業においては、授業内外の設計の中でどこに教員が関わるか。また学生に自己調整学習を促し、そのためのスキルをどのように身につかせていくか、ICTはそのための道具でしかなく、全体設計の中で活かし方を考えていくことが重要だ。」と述べられました。

その後、「本学の取り組み紹介」と題して、ワールドランゲージセンター長 尾崎准教授より、創価大学の共通科目英語教育における適応型CBTの取り組み、法科大学院の嘉多山教授から、独自にシステムを構築したハイフレックス型授業取り組み、そして国際教養学部の吉江講師より、ウィキペディアを活用した歴史教育における教育実践の取り組みの紹介がありました。

参加者からは「コロナ禍のなかで急速に進んだICTを使った授業の取り組みを今後どのように活用し、発展させていくかを考えるうえで、どの発表も大変に参考になるものでした。」「興味深いアプリケーションの活用方法や適応型CBT、ハイフレックス授業時の工夫など、これから取り組みたいと考えていた内容を学ぶことができて大変有益でした。早速、春学期授業づくりに取り組みたいと思います。」などの声が寄せられました。

参加者からは「コロナ禍のなかで急速に進んだICTを使った授業の取り組みを今後どのように活用し、発展させていくかを考えるうえで、どの発表も大変に参考になるものでした。」「興味深いアプリケーションの活用方法や適応型CBT、ハイフレックス授業時の工夫など、これから取り組みたいと考えていた内容を学ぶことができて大変有益でした。早速、春学期授業づくりに取り組みたいと思います。」などの声が寄せられました。

学士課程教育機構 新任教職員紹介

CETL センター長 …………… 関田一彦
SPACe 副センター長 …………… 高橋 薫
学士課程教育機構 講師 …………… 馬 玉晶 服部南見

WLC 准教授………… ユーケリア・ドネリ
講師………… ジェイミ・パードン
助教………… リヤ・カールータ
総合学習支援オフィス（職員）
学習支援課………… 木村孝二

■ 学士課程教育機構FD・SDセミナー （2021年度秋学期のセミナー予定）

- 第4回 11月19日（金）
文章力向上とジュニアペーパーの活用
- 第5回 2月21日（月）
インストラクショナルデザイン入門
（半日ワークショップ）

■ 第8回 教育フォーラム（第19回FD・SDフォーラム）

開催日時：2021年10月16日（土）
会 場：創価大学 中央教育棟
午前：学部別分科会
午後：基調講演（90分）（仮）「自己点検評価から見えてきた本学の強みと課題」
講師：沖裕貴 立命館大学教授



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第21号
発行日 2021年6月14日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>